

英語教育学論文用の書式細則

改定 2023 年度細則第 1 号別紙第 2 (2023 年 4 月 26 日)

修正 2024 年 6 月 22 日編集委員長職権により修正

改正 2024 年度細則第 1 号 (2025 年 3 月 22 日)

※ 現在、編集委員会に於いて改正に向けた手続きが進んでおります。5 月迄には改正細則が施行されるものと思われまます。執筆予定の皆さまは、最新の書式に拠って原稿をご準備ください。

『日本英語英文学』の論文書式について、基本的には諸先生方が普段用いられているスタイルが尊重できるような緩やかなものを考えておりますが、全体の統一という観点から、また経費の節減という事情もございまして、以下の諸点を共通書式として定めております。以下、「投稿規程」と重複する部分もございしますが、どうぞご了承下さい。

1. 書式、字体、枚数など

	英語論文	日本語論文
用紙・余白	<ul style="list-style-type: none">・MS Word で A4 判の用紙に作成・天地左右に 2.5 cm (1 インチ) の余白・1 ページに 25 行の設定	<ul style="list-style-type: none">・英語論文に同じ・横書き
字体・大きさ	<ul style="list-style-type: none">・本文、注、参照文献のいずれも、字体は Century で、12 ポイントの活字を使用	<ul style="list-style-type: none">・本文、注、参照文献のいずれも、和文は MS 明朝、欧文は Century で、12 ポイントの活字を使用・句読点は、「、」「。」を使用
原稿の長さ	<ul style="list-style-type: none">・論文、書評論文は 25 ページ以内・研究ノート、書評は 13 ページ以内・図表、注、参照文献もこのページ制限内に収める	<ul style="list-style-type: none">・英語論文に同じ
機種依存文字	<ul style="list-style-type: none">・丸付き数字、全角ローマ数字、単位記号などを含め、機種依存文字は使用しない・どうしても使用する必要がある場合には、事前に相談する	<ul style="list-style-type: none">・英語論文に同じ
英数字、丸カッコ、コンマ、コロンの後には、半角 1 つ分のスペースを空ける。前にはスペースを空けない	<ul style="list-style-type: none">・全て半角文字を使用・コンマ、コロンの後には、半角 1 つ分のスペースを空ける。前にはスペースを空けない・省略符のピリオドの後には、半角 1 つ分のスペースを空ける。文末のピリオドの後には、半角 2 つ分のスペースを空けて次の英文を始める・丸カッコの前後には、半角 1 つ分のス	<ul style="list-style-type: none">・全て半角文字を使用・引用に於ける英文は、英語論文の書式に準じる・コロンを用いた場合、その後ろには半角 1 つ分のスペースを空ける・日本語の地の文に於いては、カッコの前後にはスペースを空けない。但し、文献に言及する際は、出版年を示すカッコの前に半角 1 つ分のスペースを空ける。

	<p>ペースを空ける</p> <p>例：Brown (2015, p. 321) discusses . . .</p>	<p>参照文献表でも同じ</p> <p>例：鈴木 (2008) では……</p> <ul style="list-style-type: none"> ・欧文と和文の境目には、スペースを空けない <p>例：屈折(inflexion)には、活用(conjugation)と曲用(declension)の 2 種類がある。</p>
一重カギカッコ(「 」)、二重カギカッコ(『 』)、ヤマカッコ(〈 〉)、スミツキカッコ(【 】)、その他の特殊括弧	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的には使用しない ・どうしても使用する必要がある場合には、全角文字を使用 	<ul style="list-style-type: none"> ・全角文字を使用
原稿の 1 ページ目	<ul style="list-style-type: none"> ・論文の題目は、太字で中央揃え ・3 文字以下の前置詞、接続詞、冠詞を除く全ての語頭を大文字にする (例：During, on, the, When) ・題目の下は、1 行アケで本文を始める ・氏名、所属、謝辞などは記さない (これらは、表紙に記載) 	<ul style="list-style-type: none"> ・英語論文に同じ
空行及びインデント	<ul style="list-style-type: none"> ・各節、注、参照文献、例文の前後には、空行を挿入する ・パラグラフの冒頭は、半角スペース 5 つ分のインデント 	<ul style="list-style-type: none"> ・各節、注、参照文献、例文の前後には、空行を挿入する ・段落の冒頭は、全角スペース 1 つ分の字下げ ・引用に於ける英文は、英語論文の書式に準じる
見出し番号	<ul style="list-style-type: none"> ・Introduction は、(0 節からではなく) 1. Introduction のように、1 節から始める ・小節番号は、3.1. Strict Identity のように、数字の後にピリオドを置く 	<ul style="list-style-type: none"> ・「はじめに」或いは「序論」は、(0 節からではなく)「1. はじめに」のように、1 節から始める ・小節番号は、「3.1. 代案」のように、数字の後にピリオドを置く
米式・英式	<ul style="list-style-type: none"> ・綴りや punctuation の米式・英式は問わないが、原稿内に一貫性を保つ ・投稿に際しては、ネイティブ・スピーカーのチェックを事前に必ず受ける 	

2. 引用方法

(1)英語論文

- ・本文中の引用では、著者名の後に出版年（と引用したページ）を記載する。

Indeed, the introduction of these skills was considered one of the efforts to westernize Japan (Suzuki, 2008).

According to Matsumoto et al. (2009), debate is used to discuss an issue between affirmative and negative sides in order to persuade listeners logically.

In a recent study of language learning motivation, Brown (2015, p. 321) discusses gender-related differences in learning foreign languages.

- ・他者の著作物の記述をそのまま引用する場合は、引用文が 40 語未満であれば、以下のように double quotation marks で文中に組み込み、引用箇所の最後にページを添えてカッコで括る。引用箇所の末尾にはピリオドを付さず、ページ番号のカッコの外側に付す。

According to these results, Smith (2010) suggested that the “aptitude is the fundamental part of language learning for many Japanese learners of English” (p. 301).

- ・引用文が 40 語以上の場合、半角スペース 5 つ分インデントし、以下のように引用する。

Learners who lack motivation in the survey appeared to possess very high language anxiety and low intrinsic motivation and needed extra attention and praise for what they could do and what they were good at, which they do not usually receive from teachers (Smith, 2010, p. 302).

- ・複数の著者を引用する場合

- 2 人以内の場合、本文中の引用箇所では、著者全員を常に列記する。

Iwamoto and Shibuya (2015)

- 著者が 3 人以上且つ 5 人以内の場合、初出箇所では著者全員を列記し、2 回目以降は第 1 著者のみを記載し、et al.で省略する。

最初の引用箇所 → Iwamoto, Shibuya and Suzuki (2015)

2 回目以降の引用箇所 → Iwamoto et al. (2015)

- 著者が 6 人以上いる場合、初出から第 1 著者のみを記載し、et al.で省略する。

Iwamoto et al. (2015)

- ・地の文に於いてカッコ内に列記する場合

... such a perspective (e.g., Harter, 1999).

... developmental aspects (Holec, 1981; Wenden, 1991).

... in the traditional L2 classrooms (Neugebauer, 2011).

(2)日本語論文

- ・本文中の引用では、著者名の後に出版年（と引用したページ）を記載する。

成田（2013）は、特に日本語と英語のように言語系統も類型も違い、文法と語彙に共通性が全くない外国語を習得する場合、未習の文法的な特徴に気づくには、全般的な文法知識が必要であるとしている。

この分類に従えば、日本の学校英語教育の英語が EFL に属するという事は明らかであり、シンガポール、パキスタン、その他多くの国に見られる ESL とは性格を異にすることがわかる（大谷, 2013, p. 55）。

- ・他者の著作物の記述をそのまま引用する場合は、短い引用（目安として、3～4行）であれば、以下のよう、一重カギカッコ（「 」）で文中に組み込み、典拠箇所をカッコで括って示す。

外山（1984）は「わが国の英語英文学界の誇るべき業績の1つに英文解釈法の確立がある」（p. 137）と言いつけている。

山田（2006, p. 168）は、バイリンガルの共通基底能力とは、「言語を客体化する能力」すなわち「言語によって言語を観察しコントロールする能力」であり、最初から備わっているわけではなく育てるものであるとしている。

- ・引用文が3～4行以上の場合は、全角スペース2つ分インデントし、以下のように引用する。

菅原（2011）は以下のように論じている。

現在の教育制度の枠組みを考えた場合、教室における英語学習だけで英語が話せるようになると考えるのは無理があるし、学校の教室では「話す」ことよりも優先して教えるべきことがあるはずだ。まずは基礎的な英語力を身につけ、直読直解のプロセスを訓練することが大事である。話すことはその後でよい。そのほうが、長い目で見れば話す力も伸びてくるはずである。

（菅原, 2011, p. 224）

- ・複数の著者を引用する場合

- 2人以内の場合、本文中の引用箇所では、著者全員を常に列記する。

岩本・渋谷（2015）

- 著者が3人以上且つ5人以内の場合、初出箇所では著者全員を列記し、2回目以降は第1著者の

みを記載し、「ほか」で省略する。

最初の引用箇所 → 岩本・渋谷・鈴木 (2015)

2回目以降の引用箇所 → 岩本ほか (2015)

- 著者が6人以上いる場合、初出から第1著者のみを記載し、「ほか」で省略する。

岩本ほか (2015)

・地の文に於いてカッコ内に列記する場合

……だと主張されている(e.g., 野村, 1999)。

……という様々な立場が存在する(岩本, 1981; 鈴木, 1991)。

……などのヘッドラインの特徴が見られる(鈴木, 2011)。

3. 注、参照文献など

	英語論文	日本語論文
注 Notes	<ul style="list-style-type: none">・ Notes は、References の前に入れる・ 脚注形式ではなく、尾注形式とする・ 本文と同じ書式で記載する・ 注番号は、punctuation の後に入れる・ 注番号は、カッコなどを付さず、上付き 例：In the process of debating, ¹ we are able to learn logical thinking and critical thinking. ²	<ul style="list-style-type: none">・ 注は、参照文献の前に入れる・ 脚注形式ではなく、尾注形式とする・ 本文と同じ書式で記載する・ 注番号は、句読点の後に入れる・ 注番号は、カッコなどを付さず、上付き 例：……と考えられる。 ¹ しかし、Iwamoto (2015)では、 ² ……
参照文献 References	<ul style="list-style-type: none">・ References には、本文中に引用・言及した文献のみを記載する・ アルファベット順に並べる・ 同一著者の場合、著者名を繰り返す・ 共著の場合、and ではなく&を使用する・ 雑誌は、巻号、ページを明記する	<ul style="list-style-type: none">・ 参照文献には、本文中に引用・言及した文献のみを記載する・ 欧文、和文が混在する場合は、別々に分けずに、混在させてアルファベット順に並べる。和文のみの場合は、五十音順で並べる・ 同一著者の場合、著者名を繰り返す・ 共著の場合、中黒点（・）を使用する・ 雑誌は、巻号、ページを明記する

4. 参照文献の記載例（参照文献リストの書式は、最新の APA 方式に準ずることが望ましい。）

〈学会誌掲載論文〉

松倉信幸 (2007). 「英和辞典における感情を表す過去分詞形容詞の表記」『日本英語英文学』17, 17-26.

Pena-Shaff, J., Martin, W., & Gay, G. (2001). An epistemological framework for analyzing student

interactions in computer-meditated communication environments. *Journal of Interactive Learning Research*, 12(1), 41–68.

Shibuya, K. (2008). Changes of motivational intensity in learning a foreign language: A study of university students in Japan. *Studies in English Linguistics and Literature*, 18, 1–16.

Williams, M., & Burden, R. L. (1999). Students' developing conceptions of themselves as language learners. *The Modern Language Journal*, 83, 193–201.

〈単行本中の論文〉

Giles, H., & Smith, P. M. (1979). Accommodation theory: Optimal levels of convergence. In H. Giles & R. N. St. Clair (Eds.), *Language and social psychology* (pp. 45–65). Basil Blackwell.

Shibuya, K. (2015). The developmental processes and patterns of Japanese students' motivation for learning English. In K. Shibuya, T. Nomura, & S. Doi (Eds.), *Vantage points of English linguistics, literature, and education* (pp. 133–143). DTP Publishing.

山田七恵 (2015). 「時制の一致の教授に対する一考察」 渋谷和郎・野村忠央・土居峻 (編) 『英語と文学、教育の視座』 (pp. 169–179). DTP 出版.

〈単行本、著書〉

Lightbown, P. M., & Spada, N. (2006). *How languages are learned* (3rd ed.). Oxford University Press.

永谷万里雄・清水和子・仙土真由美・松倉信幸・鈴木繁幸・木内修 (編) (2006). 『言語と文学の饗宴: 岡田春馬先生帝京大学名誉教授就任記念論文集』 DTP 出版.

Nomura, T. (2006). *ModalP and subjunctive present*. Hituzi Syobo.

Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G., & Svartvik, J. (1985). *A comprehensive grammar of the English language*. Longman.

鈴木雅光 (2000). 『例外の文法』 東京精文館.

竹内理・水本篤 (編著) (2014). 『外国語教育研究ハンドブック: 研究手法のより良い理解のために』 (改訂版) 松柏社.

〈学位論文〉

佐藤雄大 (2012). 『ライティング・プロダクト分析を中心としたダイアログ・ジャーナル・ライティング研究』 名古屋大学博士学位論文.

Shibuya, K. (2010). *The development of L2 motivation of Japanese learners of English as a foreign language* [Doctoral dissertation, University of Cambridge].

※修士学位論文(Master's thesis)の書式も上記に準ずる。

〈オンライン資料〉

Grunebaum, D. (2017, January 2). *Japanese is affecting the English lexicon in new ways*. The Japan Times. <https://www.japantimes.co.jp/life/2017/01/02/language/japanese-affecting-english-lexicon-new-ways/>

日本心理学会 (2022). 『執筆・投稿の手引き』 (2022 年版) <https://psych.or.jp/manual/> (2023 年 2 月 26

日閲覧)

U.S. Census Bureau. (n.d.). *U.S. and world population clock*. U.S. Department of Commerce. Retrieved March 10, 2023, from <https://www.census.gov/popclock/>

山中伸弥 (2022). 「年代別致死率の推移」『山中伸弥による新型コロナウイルス情報発信』 <https://www.covid19-yamanaka.com/sp/cont1/42.html> (2023年2月26日閲覧)

※そのサイトやページが今後更新される可能性が高い場合には、閲覧年月日を記載する。更新可能性が明確でないものについては、閲覧年月日の記載を推奨する。公開等の年月日が確定できない場合は、n.d.と表記し、閲覧年月日を記載する。

〈辞書〉

新村出 (2018). 『広辞苑』 (第7版) 岩波書店.

Stevenson, A. (2010). *Oxford dictionary of English* (3rd ed.). Oxford University Press.

附 則

この細則は、『日本英語英文学』第33号より適用する。

附 記

この細則は、2023年度規程第3号による投稿規程の改正が反映されていなかったため、2024年6月22日編集委員長職権により修正した。この修正は、同日より施行した。

附 則 (2024年度細則第1号)

この細則は、『日本英語英文学』第35号より適用する。 ■